

注意！

■この記事は発行年月日時点の内容のまま公開していますので、ご覧になった時点の法規制(農業使用基準等)等に適合しなくなった内容を含む可能性がありますから、利用にあたってはご注意ください。

農作物技術情報 第6号 花き

発行日 平成25年 8月29日
発行 岩手県、岩手県農作物気象災害防止対策本部
編集 中央農業改良普及センター 県域普及グループ (電話 0197-68-4436)

携帯電話用QRコード



「いわてアグリベンチャーネット」からご覧になれます
パソコンからは「<http://i-agri.net>」 携帯電話からは「<http://i-agri.net/agri/>」

- ◆ 共通 排水対策、病虫害防除を徹底し、良品の出荷に努めましょう。
- ◆ りんどう 収穫後、翌年に向けた管理を徹底しましょう。
- ◆ 小ぎく 健全な親株を確保・養成しましょう。
- ◆ 施設花き 施設の風通しなどの環境管理に注意しましょう。

りんどう

1 生育概況

早生種は着蕾以降の長雨、日照不足の影響から昨年よりやや遅れた開花となりました。現在、中生種の出荷が始まっています。

長雨や大雨による圃場の浸水などの影響で茎枯病などによる立枯れや根腐れ症状の発生が多くなっています。また、炭疽病や黒斑病の発生もみられています。害虫ではハダニ類、アザミウマ類が多くなっているほか、リンドウホソハマキの発生が続いています。

今後の重要病害となる花腐菌核病は、例年より遅れた発生となる見込みです。

2 圃場管理

7月以降、降雨が多かったことから圃場の過湿が原因とみられる病害や根腐れ症状の発生が多くなっています。今後も水路などからの水の流入を防止するとともに、長時間滞水しないよう排水路の点検を行うなど排水対策を徹底してください。

また、乾燥気味の場合には、極度に乾燥する前に通路等にかん水します。ただし、長時間水を溜めることや高温時のかん水は避けてください。

3 病虫害防除

(1) ハダニ類

発生が増加傾向にあります。気温の低下に伴い発生は減少しますが、9月中旬頃には越冬成虫が現れはじめ防除効果が低下する(農薬が効きにくくなる)ため、9月上旬までにハダニの密度を下げないように防除を徹底します。葉裏へ十分薬剤が付着するように薬剤散布を行います。

(2) アザミウマ類

収穫後の残花で増え、多発している圃場がみられます。蕾が着色する頃から寄生して花の内部で増殖するので、その時期から防除を徹底し、収穫後の残花の着いた茎部分を折り取ります。圃場周辺の作物や雑草の防除も併せて実施します。

(3) リンドウホソハマキ

現在も発生が続いています。被害がみられている圃場では防除を継続します。また、定植株への被害も見られますので採花年株とあわせて継続して防除します。

(4) オオタバコガ

一部の地域では花蕾の食害がみられています。圃場をよく観察し、発生がみられる場合は効果のある薬剤を選択し防除してください。

(5) 花腐菌核病

菌核にできた子実体(きのこ)から孢子が飛散し、花卉に付着して感染しますが気温の低下に伴い、冷涼地から孢子の飛散が始まります。

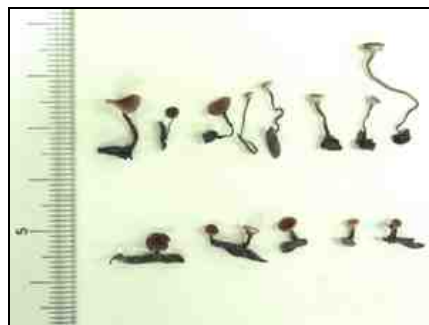
各地域での防除情報を参考に適用薬剤での防除を開始してください。



花腐菌核病被害花



株元に形成された子実体



菌核上に形成された子実体

(6) 葉枯病

今年の発生は少なめですが、一部上位葉での発生がみられ始めています。秋季にも拡大する場合がありますので、今後収穫する品種と併せ、収穫終了した品種も防除を継続します。

(7) 黒斑病

降雨が多く、発生が多くなっています。葉表面の傷口から容易に感染しますので、効果のある薬剤を発病前から9月中旬にかけて散布し予防してください。

4 収穫後の管理

(1) 早生・中生種では、生育の状況により収穫後に窒素成分で3~5kg(10aあたり)を追肥し、株養成に努めます。

(2) 収穫後の圃場では防除が手薄になり病害虫が多発する場合があります。翌年の発生源となるので、収穫後も防除を継続してください。収穫後の薬剤は葉の汚れへの配慮は不要なのでコスト低減も考慮して選定してください。

(3) 害虫や花腐菌核病の防除のため、残花のある茎部分を折り取ってください。この作業は株養成のためにも効果的です。また、定植年の株でも開花しますので、できるだけ花を摘み取ります。

小ぎく

1 生育概況

盆需要期の出荷は、若干開花が早まった地域がある一方、遅れた地域もあり地域差がみられました。9月咲き品種は着蕾の肥大も始まり概ね順調な生育となっています。

病害虫では、白さび病、ハダニ類、オオタバコガの発生が多くなっています。オオタバコガのフェロモントラップでの捕殺数は8月下旬以降増加しています。各地域の防除情報を参考に防除を徹底してください。

2 かん水

キクの根は過湿に弱く、冠水した圃場では萎れなどが見られています。今後も降雨が続くような場合、長時間圃場に滞水しないよう排水対策を行ってください。

逆に圃場が乾燥している場合、品質低下や蕾の発達が遅れる原因となりますので適宜かん水を実施します。ただし、長時間水を溜めることや高温時のかん水は避けてください。

3 病害虫防除

(1) 白さび病

7月以降、降雨が続いたことから発生が多くなっています。5～7日間隔で薬剤散布し予防することが基本ですが、既に発生がみられている圃場や降雨が続く場合や散布間隔を狭めて防除してください。

(2) オオタバコガ

県内各地で生長部の食害が確認されています。8月下旬以降、発生が増加しており、第3世代の産卵時期となっていますので、これまでどおり各地域の防除ごよみや防除情報を参考に防除を徹底してください。

(3) ハダニ類、アブラムシ類、アザミウマ類の発生もみられていますので防除を継続します。

4 母株選抜・養成

翌年採穂用の母株は、収穫前の選抜を徹底します。特に、えそ病やわい化病の感染株は見つけただい株ごと抜き取り、圃場に残さないようにしてください。また、下葉からの枯れ上がりがみられる株は、土壌病害が原因となっているものもあります。翌年の苗にすることで感染が広がることも考えられるので、枯れ上がりのみられた株の母株への使用は避けます。

残した株は病害虫防除を継続し、茎葉が伸びた場合は適宜台刈りを行います。またマルチ栽培の場合には収穫後すぐにマルチをはがし追肥と土寄せを行います。

施設花き

1 高温対策

施設の開口部を開放して十分に換気できるようにしてください。その際、循環扇等を利用すると効果的です。また、必要に応じて遮光資材を展張し、気温や地温の低下を図ります。ただし、ストック、パンジー等育苗中のものについては徒長を避けるため過度の遮光とにならないよう注意します。

2 ストック

(1) かん水

活着後は2～3日おきにたっぷりかん水します。最初に根を深く張らせることで後半にかん水を控えても萎れないようになり、品質確保につながります。過剰なかん水は立ち枯れ性病害の発生を助長するので、適量かん水を心がけます。

(2) 遮光・温度管理

活着後は速やかに遮光資材を除去し、十分な日照を確保します。ハウスは開放し、気温が上がらないような管理とし、高温による生理障害や品質低下の発生を防ぎます。

(3) コナガ防除

殺虫剤による防除をしますが、抵抗性獲得を避けるため異なる系統の薬剤をローテーションで使用します。ハウスの開口部を防虫ネット（目合いが1mm以下のもの）でふさぐことも効果的ですが、通気性が悪くなり品質低下の原因となる場合があるので、注意します。

次号は9月26日（木）発行の予定です。気象や作物の生育状況により号外を発行することがあります。発行時点での最新情報に基づき作成しております。発行日を確認のうえ、必ず最新情報をご利用下さい。

中央農業改良普及センター県域普及グループは、現地農業改良普及センターを通じて先進農業者に対する支援活動を展開しています。